

帝国データバンクのいろいろ・・・

信用調査業界では、帝国データバンクが約 60%、東京商工リサーチが約 30%のシェアを占めており、この2社で業界の 9 割近いシェアを占めています。

特に帝国データバンクの情報は、銀行・信用金庫などの金融機関は新規営業先の発掘などのために、リース会社は与信判断そのものに利用していますので、中小企業の資金調達にも非常に大きな影響を持つものですが、その詳細はあまり知られていません。

そこで、私の様々な人脈の中で調べることのできた範囲の情報を下記に記載させていただきますので、今後のご参考にいただければと思います。

【評点をつけるときの調査員の心の中とは？】

52 点以上の評点を付ける際は、調査員も自分の首をかけて評点をつけるそうです。

52 点以上の評点の会社がいきなり破たんでもしたら、帝国データバンク自体の信用問題となるため、評点をつけた調査員は本社の査問委員会にかけられ、きつく追及される事態になるとのことで、52 点以上をつける際は非常に慎重になるそうです。つまり、評点 52 点以上がついている会社はそれだけ信用度が高いという証になります。

【企業訪問による面談は、一回何時間くらい？】

企業を訪問しての面談は、平均すると 1 時間程度です。社長の話を鵜呑みにすることは全くなく、得意先や仕入先から評判を集めたり、金融機関からもヒアリングを行ったりして、必ず社長の話の裏をとります。そのため、実際の調査時間は長くなります。

【一人で調査するのか？複数で調査するのか？】

一企業の調査にあたるのは一人の調査員のみです。

【評点の決定プロセスは？】

調査員が報告書をまとめた後、二度の審査を経由して、評点が決まるようになっているので、調査員の独断で決まることは無いそうです。

各項目ごとに点数を積み上げた結果が評点になるのではなく、社長との面談が終わった時には、調査員の頭の中でこの会社の評点はだいたい何点くらいと数字が出ています。それに合わせて帰社後に、その評点になるよ

う細部をつめていき報告書を完成させるというやり方です。

【評点の上がる・下がるペースは？】

絶対ではありませんが、やはり A(100~86 点)、B(85~66 点)、C(65~51 点)、D1(50~46)、D2(45~41)、D3(40~36)、E(35 点以下)の区分の中で最上位まで上がった上で、次のランクに上げるようにしているそうです。一気に評点を上げてしまった直後に破たんしたりすると調査員が責任を問われるためです。徐々に徐々に上げていくので評点が上がるとは時間がかかります。

ただ、逆に赤字になったからと言って一気に下がることもなく、下がるときも徐々に下がります。万が一、一気に評点を下げたことが当該会社に発覚した際に、怒鳴り込まれると厄介なため、下げるときも気を遣うとのこと。

【評点を上げるポイントは？】

資本構成(自己資本比率のこと)、会社規模(売上規模のこと)、資金現況(資金繰り状況・金融機関の支援状況・経常収支比率のこと)の 3 つの配点が高いため、この 3 つを高めるよう財務コントロールをすることです。

社長の面談の際には、メインバンクからの支援がしっかり受けられていることを必ずアピールしてください。

【法令違反はどれくらい影響があるか？】

発覚してもすぐに評点を下げるようなことはないそうですが、調査報告書を依頼したり、評点を見ようとする方に対して、「この報告書を作成後に入手した情報がありますので、帝国データバンクの担当者にお問い合わせください」と青字で出るようになっており、帝国データバンクの担当者に電話すると、口頭でそのネガティブ情報を教えてもらえるようになっています。

刑事事件による逮捕などは、一発で「反社会的勢力」と認定され、その記録は一生消えることは無いそうです。刑事罰には時効がありますし、しっかり罪を償ったとしても、罪を犯した記録が消えることは一生ありません。

経営者で刑事罰を問われた方は、今後一生経営者になることはできないと思った方が良くとのこと、それくらいコンプライアンス違反は信用の世界では致命傷となりますのでご注意ください。